

災害ボランティアステーション

Station for disaster volunteer in Wakayama University

宮定章¹，西川一弘²，南出考²

¹災害科学・レジリエンス共創センター，²紀伊半島価値共創基幹

1. プロジェクトの背景

和歌山大学では、2004年から大学の知的資源を最大限に活用し、自治体と連携しながら地域防災力の向上を推進する和歌山大学防災研究教育プロジェクトを立ち上げた。その後変遷をしながら、2016年「災害科学教育研究センター」として、防災まちづくり・防災地域づくりの提案と地域との協働作業、防災プログラムの開発と実施、防災のための知識・知恵や情報発信等を行い、防災教育に力を入れてきた。本年2020年度から、紀伊半島価値共創基幹のもと、災害科学・レジリエンス共創センターとして改組した。パイロットプロジェクトの柱の一つに「防災・減災・復興の担い手づくり」を位置づけ、これまでの自治体や地域との連携や、防災による知見を活かし、担い手づくりを強化していくことにした。

特に、2020年8月には、和歌山県社会福祉協議会から価値共創研究員（南出考氏）を迎えた。南出氏は2008年に常設の災害ボランティアセンター設置に尽力をされてこられた。本学の災害ボランティアステーション運営にも指導をいただいている。

本プロジェクトは実施にあたり、教員だけでなく、災害支援に詳しい職員とともに取り組んでいる。

2. プロジェクトの目的

「防災・減災・復興の担い手づくり」では、これまで和歌山大学の研究・教育の知見を活かして、教育機関として、担い手づくりを行い、地域貢献をすることを目的としている。

その一つとして、災害ボランティアステーションの設置が検討され、2011年3月11日14:46に発生した東北地方太平洋沖地震に起因する東日本大震

災からちょうど10年となる2021年3月11日に、和歌山大学災害ボランティアステーション（愛称：むすぼら、以下むすぼら）を開設した。

本ステーションは、下記の2点を目的として、災害科学・レジリエンス共創センター内に設置した災害ボランティア部会が管轄している。

（ア）多発する災害に対して決して他人事はなく「自分ゴト」として捉えるとともに、災害フィールドに関わることを通じて、災害時の危機管理能力・対応力の向上を目指す。

（イ）大規模災害が発生した場合、災害ボランティアの育成・諸活動を通じて、当該被災地域の復旧・復興に貢献する。

（災害科学・レジリエンス共創センター災害ボランティア部会要項より引用）

3. プロジェクトの活動内容

前年度の末（2021年3月）に設立され、本年度は、実質1年目にあたる。本年度1年の活動を報告する。



図1 むすぼら設立集合写真（2021年3月11日）

3.1 オンラインミーティング

2021年の新学期が始まる4月2日に「さいしょのミーティング」を対面で行った。19名が参加し、むすぼらの趣旨説明、自己紹介（参加動機等）、むすぼらへ期待することなどを話し合った。その後、緊急事態措置が実施され、感染症対策で、課外活動が原則禁止になったこともあり、オンラインミーティングになった。計4回（2021年4月23日、5月7日、5月25日、6月10日）では、自己紹介に始まり、むすぼらで得たいこと（Get）、やってみたいこと（Give）を出し、企画力・調整力をつけるミニミニセミナーや、ワーキンググループ（WG）の進め方を話し合ったりした。



図2 「さいしょのミーティング」で出し合ったむすぼらでしたいこと

3.2 防災食体験会

オンラインミーティングで話し合いを続け、集うことは難しくても、なにかできることはないかと模索し、災害時に命を守りぬくためのノウハウ（今回は、アルファ米の食べ方工夫、新聞紙の器づくり）を身につけるための、防災食体験会なら、オンラインでできると企画した。参加希望者を募り、参加者には、アルファ化米等を事前に送り、6月23日に、オンラインミーティングを通じて、各自が工夫した調味料を利用したレシピを発表した。

そして、登校できるようになった7月2日、感染症対策のため2部屋（Kii-Lab.（学生オープンスペース）と会議室）を利用し、20名が参加し対面で防災食体験会を実施した。



図3 感染症対策をした防災食体験

3.3 防災ゲーム体験

災害時に命を守りぬくための知識をつけるため、7月7日～7月30日を防災ゲーム月間とし、毎週ゲームを行い、防災知識を身につけました。

ゲームは、和歌山県が制作した「きいちちゃんの災害避難ゲーム」^[1]、「災害協力シミュレーションダイレクトゲーム」^[2]、「避難所運営ゲーム HUG」^[3]、の3種類を行った。

それぞれに特徴があり災害対応に必要な視点を学ぶとともに、ゲームの仕方を習得し、由良中学校（和歌山県由良町）が大学見学に来られたときに、「きいちちゃんの災害避難ゲーム」を用いて、災害から命を守るための術を伝えた。



図4 防災ゲームの実施

3.4 オンライン部室

学生が帰省する夏季休業中に、新しいオンラインツールを用いて、コロナ禍でも、コミュニケーションが図れるように、アバターが自由に動き回れる仮

想空間アプリ oVice⁴⁾ を使って、「むすぼらオンライン部室@oVice」を行った。東日本大震災、そして紀伊半島大水害で災害ボランティアをされた本学 OB が当時の思いを語り、本学における災害ボランティアの歴史について学びました。東日本大震災、紀伊半島大水害 10 年であり、学生とともに現地を訪問し学びたかったが、感染症の継続のため、現地訪問は難しいため、教員が現地を訪問し、オンライン配信を行った⁵⁾。

3.5 給水ボランティア活動

2021 年 10 月 3 日（日）に、和歌山市の六十谷水管橋崩落で、和歌山市北部は大規模な断水が発生した。“むすぼら”の活動理念の一つである『地元もピンチに立ち上がろう』に即し、当センターからの呼びかけで、本大学から延べ 78 人の学生が給水ボランティアに参加した。

参加した学生の一人は「心の底から感謝され、ボランティアの必要性を感じた。困っている人を助けることができ、やりがいも感じた」と話した。ボランティア活動は、困った人が助かるだけでなく活動した方も達成感を得られることを実感した。別の学生は「地域に水を運ぶのに困る人がこんなに多くいることを知った」と、地域の課題にも関心をもち、活動を継続している。全国の多くの大学にボランティアセンターはあるが、災害に特化したセンターは珍しい。常設していたおかげで、断水から 2 日後と迅速に活動を開始することができた。和歌山市役所や、水を運ぶのを手伝ってもらった方、その様子を見た方から、多くのお礼の手紙を受けた。



図 5 給水ボランティアミーティング



図 6 「水運び手伝います」呼びかけの様子



図 7 給水時も地元の方に声かけを行う様子

3.6 学内関係者へ防災力強化のための体験実施

（公社）日本非常食推進機構、和歌山大学生協との連携による学生生活応援&SDGs 推進企画が、1 月 24 日～28 日まで行われた。防災グッズと非常食が配られている会場近くで、26 日～28 日の 3 日間、むすぼらは、防災カードゲーム体験（啓発・防災教育 WG）、ロープワーク演習（スキル研修 WG）、焚火体験（地域活動・現場活動 WG）を行った。教職員から鉄道用はしご体験、新聞紙お椀づくり+ポリ袋クッキング体験、高齢者疑似体験を企画し、むすぼらメンバーがサポートし実施した。



図8 鉄道用はしご体験



図9 車椅子体験



図10 焚火体験

4. プロジェクトの成果

本年度は、前年度同様コロナ禍で課外活動の禁止や、感染症対策と課題を抱えたが、むすぼらでは、オンラインと対面を適宜使い分け、活動を行った。

報道に多く取り上げられた⁶⁾。それは学生たちの励みとなるとともに、地域の方にむすぼらを知ってもらう機会になった。わかやま産業振興財団のテクノサロンや、新聞連載⁷⁾で、活動紹介の場を頂いた。

給水ボランティア後、参加した学生が、給水ボラ

ンティアを実施した地区には高齢者が多い等、災害時地域で困難を抱える可能性があることを実感し、地区の自治会長や民生委員と知り合い、防災訓練に参加するなど、協働が生まれている。給水ボランティアで、技術的・物理的課題を感じ、災害ボランティアリーダー育成の研修や、むすぼらメンバーが増えるよう新入生勧誘を考え、さらに、『災害ボランティア学』新規講座を設置にも繋がっている。

報告したプロジェクトは、多くの自治体の方や、地域の方々や、特に、和歌山県社会福祉協議会、日本財団学生災害ボランティアセンター、和歌山県土砂災害啓発センター、新宮市社会福祉協議会熊野川ステーションが協力してくださったからこそ実施できた。本報告をもって、感謝を伝える。

来年度も、大学の防災力強化、そして、地域に育まれ、地域のお役に立ち、地域に笑顔を増やすづくりを目指して、「防災・減災・復興の担い手づくり」を行っていく。

注

[1] きいちゃんの災害避難ゲーム | 和歌山県

<https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/011400/kiichangame.html>

[2] 災害協力シミュレーションゲーム ダイレクトロード - 神戸市

<https://www.city.kobe.lg.jp/a10878/bosai/shobo/bousai/directroad.html>

[3] 避難所運営ゲーム (HUG) について - 静岡県

<http://www.pref.shizuoka.jp/bousai/e-quakes/study/hinanjyo-hug.html>

[4] となりで話しているような、バーチャル空間を。

- oVice

<https://ovice.in/ja/>

[5] 現地からのオンライン配信については、東日本大震災のあった福島県双葉町、宮城県女川町、紀伊半島大水害のあった那智勝浦町と、新宮市熊野川町日足地区から行った。那智勝浦町では和歌山県土砂災害啓発センター、と日足地区では、新宮市社会福祉協議会熊野川ステーション、日本財団の協力により、配信機器を、無償で提供いただいた。

[6] ここまで来た！災害ボランティアの「集まれ BOSAI 仲間」のコーナー (NHK 明日をまもるナビ 2022年1月23日)

[7] わだいの災害科学 ボランティア 地域と共に (朝日新聞 2022年02月13日)